目標解答時間 15分

＿＿＿月＿＿＿日

内容理解（中文） Comprehension (Mid-size passages)

次の(1)から(3)の文章を読んで、後の問いに対する答えとして最もよいものを、1・2・3・4から一つ選びなさい。

(1)

読書の習慣化という意味では、小学校時代はまさに「黄金期①」なんです。この時期に子どもが本にどう向き合うのかによって、その後の状況が大きく変わっていきます。

今の小学生が親世代と違うところは、すでに物心(注1)ついたころからスマホやSNSが身の回りにあったという点です。

それ以前の時代に育った世代は、本に触れる機会がまだまだ多かったのではないでしょうか。その中で本の面白さを発見し、本からさまざまなメリットを受け取ってきたと思います。幼少期にそうした経験を持っている人たちは、大人になった今でも「本を読む」という行為が生活の一部になっているはずです。

幼いころの体験には計り知れない(注2)影響力があります。本の楽しさを知ることができた子どもたちは、将来、スマホにハマった(注3)としても、必ずどこかで本に戻ってきます。幼少期の本とのふれあいは、長年にわたって効果を発揮(注4)し続けるのです。

ところが、そうした経験②を一度もせずに、スマホやSNSの世界にいきなり放り込まれれば、子どもたちは読書を一切しない人生を送ることになるかもしれません。

（中略）

いい本に出合うと人はさまざまな感情に揺さぶられ、内面に大きな変化を起こします。その変化は目には見えませんが、とても大切な要素であり、人の成長には欠かせません。

本とのいい出合いを数多く経験し、豊かな人生を築いていってほしい――。私のみならず、これこそがすべての親御さんの望みなのではないでしょうか。

（東洋経済オンライン<https://toyokeizai.net/articles/-/395126> 2021年2月23日による）

（注1） 物心ついたころ：幼児が身の回りのことを理解できるようになったころ
（注2） 計り知れない：想像できないほどの
（注3） ハマる：はまる。夢中になって抜け出せなくなる
（注4） 効果を発揮する：効果を示す

LIVEWORKSHEETS

1 この文章で①黄金期(おうごんき)とはどんな時期か。

1 本の好みが決まる時期

2 読書の習慣がつく時期

3 本の内容に行動が左右されやすい時期

4 本以外のものに興味の対象が変わる時期

2 ②そうした経験とはどんな経験か。

1 本を読んでその面白さを知る経験

2 本からスマホやSNSの使い方を学ぶ経験

3 スマホやSNSに夢中になった経験

4 本の魅力(みりょく)を親から教えてもらう経験

3 筆者の考えに合っているのはどれか。

1 本を読んで育った人でも、スマホに夢中になると読書をしなくなってしまう。

2 親は子どもにスマホを与える代わりに、たくさんのいい本を与えるべきだ。

3 子どもたちには本を通して、いろいろな人たちと出会ってほしい。

4 本を読んでいろいろな気持ちを抱くことで人は成長できる。

LIVEWORKSHEETS

(2)

正常と異常、健康と病気、そういう区別がはっきりあるのだというようなものの見方では、大切な本質は見えてきません。ただ診断マニュアル(注1)に従って病気の診断をし、それに基づいた知識を投入し診察をしても、そのクライアント(注2)個人の抱える問題の本質からは遠ざかるばかりです。

近代以降の社会は、確かにそういうふうに正常と異常を分けて考えてきたけれども、元々は境目のない、連続したものであるということ。そういう分け隔て(注3)のない見方で人間を見た上で、この場合にはこういう意味で精神医学的なサポートが必要だという順番で考えていくのでなければならないわけです。

しかし、①これは医療者側だけの問題ではありません。クライアント自身も「自分は異常なんだ」とか「私はどうせ病気なんだから」というように、自分に対して差別的な見方をしてしまっていることがかなりあります。そう見てしまったのでは、自分の内部で先ほどの図(注4)の右側と左側のような分断が起こってしまい、問題が余計に複雑になっていってしまいます。

まずは、自分を一つのものとして捉えていくこと、異常／正常というレッテル(注5)貼りを自分自身に対して安易に行わないこと、②そういうことがとても大切だと思うのです。

(泉谷閑示『「普通がいい」という病』講談社による)

(注1) マニュアル：説明書。手順が書かれたもの
(注2) クライアント：客。この文章では精神科にやってきた患者
(注3) 分け隔て：相手によって扱い方に差別をつけること
(注4) 先ほどの図：この文章より前の部分で、筆者は異常と正常をはっきりと区切る線を引いた図を使い、分断について説明している。
(注5) レッテル貼り：一方的、断定的に評価をつけること

LIVEWORKSHEETS

1 筆者は、精神科における診察についてどう考えているか。

1 しっかりと病気と向き合えるように、患者には病名をきちんと示すべきだ。
2 患者の問題を見落とさないように、診断マニュアルに厳密に従うべきだ。
3 患者の不調を異常とは考えず、それぞれの症状に合った支援をするべきだ。
4 どのような状態の患者に対しても、サポートの方法は同じであるべきだ。

2 ①これとは何か。

1 精神的な異常が生じること
2 問題に本質から取り組むこと
3 正常と異常を分けて考えること
4 精神病患者として差別されること

3 ②そういうこととはどういうことか。

1 健康が何よりも一番いいと思い込まないこと
2 自分の問題は人のより複雑だと悩まないこと
3 自分は一人ぼっちで孤独だと考えないこと
4 自分が正常か異常かを簡単に評価しないこと

LIVEWORKSHEETS

(3)

赤ちゃんはこれから学んでいく母語がいつごろからわかるのでしょうか？　もっとも「母語がわかる」というのは曖昧(あいまい)な言い方で、答えようがないかもしれません。言語の学習には、母語で使う音の学習、ことばの意味の学習、文法の学習など実にさまざまな要素(ようそ)があります。その中で、赤ちゃんが最初に学習するのは母語のリズムとイントネーションの特徴(とくちょう)です。どのくらい早いかというと、なんと赤ちゃんがお母さんのおなかの中(注)にいる時からはじまるのです。赤ちゃんは羊水(ようすい)という水の中にいます。水中にいると、外で何を話しているかよく聞き取れませんね。でも、音が高くなったり低くなったりするのはわかります。また、例えば「ダダダ、ダダー、ダダダダ、ダダッ」といったリズムは水中でもよく伝わります。赤ちゃんは自分の置かれた環境、つまり水の中でも、できることをはじめているのです。

実際、生まれたばかりの赤ちゃんは、自分の母語と母語でない言語を聞き分けることができます。日本語の環境にいる赤ちゃんに英語や中国語を聞かせると、日本語とイントネーションやリズムのパターンが大きく異なることから、それが自分の聞き慣れている言語ではないことにすぐに気づくのです。

（今井むつみ『ことばの発達の謎を解く』筑摩書房による）

(注) イントネーション：話すときに現れる声の上がり下がり。音調

LIVEWORKSHEETS

1 答えようがないかもしれませんとあるがなぜか。

1 どんな状態を「母語がわかる」というのか決められないから

2 赤ちゃんは自分がどのくらい理解しているか答えられないから

3 言語によって赤ちゃんにとっての難しさが違うから

4 赤ちゃんの言語力を測定することは非常に難しいから

2 筆者によると、赤ちゃんはお母さんのおなかの中で何をしているか。

1 母語の発音を聞いて、それがまねできるように、発声の準備をしている。

2 母語のリズムやイントネーションに合わせて自分の体を動かしている。

3 リズムやイントネーションから、自分の母語とそれ以外を聞き分けている。

4 外から伝わる音を聞いて、母語のリズムとイントネーションを学んでいる。

3 筆者によると、生まれたばかりの赤ちゃんにできることは何か。

1 外国語を聞いて、そのリズムやパターンを覚えること

2 外国語を聞いて、それが自分の母語ではないと気がつくこと

3 複数の外国語を聞いて、それらの外国語の違いに気がつくこと

4 自分の母語を聞いて、そのリズムやパターンをまねすること

LIVEWORKSHEETS